

本名で生きている人々

在日外国人問題を考える

国際化が叫ばれて久しくなりますが、私たちの住む日本には、もともと多くの外国籍の人や外国にルーツを持つ日本国籍の人が暮らしています。ところで、私たちはその人たちに対して偏見を持ったり、差別をしたりすることはないでしょうか。

今回は、在日コリアン（在日韓国・朝鮮人）に対する差別をなくしていく取り組みを行っている鳥取県東部在日外国人教育研究会の中尾聡さんにお話を聞きました。

研究会でどんなことを知り、学びましたか？

活動しようと思ったきっかけは？

教員となって初めて、自分の本当の名前で生活できていない生徒の存在を知りました。と同時に、私自身、生徒の本名さえ知らない教員であったことに気づかされました。しかも私は、本名で生活することへの不安を語る生徒の言葉に「がんばれ」「強くなれ」としか言えませんでした。本名

を名乗りづらくさせているのはいったい誰なのか、考えようともしていない自分をとても恥ずかしく思いました。また、自分に何ができるのか、この問題をどう考えるのかなどを、学んだり、話し合ったり、情報を交換したりする機会がとても少ないと思えました。そこで、同じような思いを持った人たちと「鳥取県東部在日外国人教育研究会」を作り、この問題についての学習を始めることにしました。

話し合いの中で、高校の先生たちはずっと以前から、指紋押捺の問題や、就職差別の問題などに取り組んでこられたことを知りました。また、

在日（外国籍）の人たちの資格取得、就労、教育、社会保障などで国籍条項に関する課題がたくさん残っていることも知りました。また、在日の子どもや保護者の思いを教材化した例や、本名で卒業していった高校生についてのレポートなど、互いの問題意識や取り組み状況を交換しました。

先日、「外に出ると、仮面をつけた自分がある。韓国人でも日本人でもないと思っていた。いったい自分は何なのかと問うてもきた」という言葉を聞きました。あらためて、

私たちの社会や学校が、自分の本名や民族性、文化などに胸を張って生きることを難しくさせているということに気づかされました。また、そうさせているものを問わないまま「海の方」「との交流ばかりを進めても「本当の国際化」は築けないことを知りました。そして、意識的・意図的な差別だけではなく、「知らない」「無関心」、そして「何もしない」ということも差別だということを感じました。

今後、どんなことをしていきたいですか？

確かに、資格取得や公務員採用における国籍条項撤廃など、以前と比べると改善されつつあります。しかし、単に制度が変わったというだけでは、差別はなくならないこと

を私たちは学んできました。私たちはこれから、外国の多様な文化や民族性を尊重して、共生する社会を築いていくためにもっと多くの人と話し合っていきたいと思っています。そこで何ができるのか、何をしていくべきなのかなど、自分の課題を具体的に見つけ、実践していきたいと考えています。



研究会のようす